

衛生文脈における目標伝染

○ 鈴木宏昭¹・太田真梨子²(非会員)・山田歩³・福田玄明⁴

(¹ 青山学院大学教育人間科学部・² 青山学院大学大学院社会情報学研究所³ 青山学院大学 HIRC・⁴ 東京大学)

キーワード: 目標伝染、衛生

A Dual Task Analysis of Onomatopoeia Processing

Hiroaki SUZUKI¹, Mariko OHTA², Ayumi YAMADA³, and Haruaki FUKUDA⁴

(¹Department of Education, ²Graduate School of Social Informatics, ³HIRC, ¹²³Aoyama Gakuin Univ., ⁴The University of Tokyo)

Key words: Goal Contagion, Health

目的

近年の実験社会心理学の研究では、人間は知覚などの提示認知プロセスだけでなく、推論や思考などの高次認知活動においても、環境からの情報を無意識のうちに利用していることが明らかになってきている。特に Aarts et al. (2004)の目標伝染の研究では、被験者が刺激文の中の登場人物の目標を推論し、その目標を無意識のうちに採用し、自らの行動を変化させることが報告されている。この研究は目標の設定、採用という従来は意図が深く関与するとされてきた活動においても、環境からの無意識的な情報の取り込みと利用が見られたという点で非常に興味深い。

本研究では、衛生、特に手洗いという文脈を設定し、そこでも目標伝染が起きるか否かを検討する。実験の枠組みは Aartsら(2004)のものと同様である。すなわちある目標(衛生の維持)の下での行動であることが容易に推論できる文章を被験者に読ませる群とそうでない群とを設け、その後の両者の行動の違いを検討する。両群の被験者とも、衛生に対して敏感である女性のインドの日本食レストランにおける行動を記述した6文からなる文章を読むことが求められた。2つの群の文章はほとんど同じであるが、最後の2つの文だけが以下のように異なっている。

- 1) 実験群: 「裕子さんは刺身定食を注文することにしました。しかし、考え直して、焼き魚定食を注文しました。」
- 2) 統制群: 「裕子さんは焼き魚定食を注文することにしました。しかし、考え直して、刺身定食を注文しました。」

実験群の文章の主人公の注文の変更が衛生に関するものであることが容易に理解できる。一方、統制群の文章においては変更の理由は明確ではない。予備調査を行ったところ実験群の文章については、変更の理由として衛生に関することを挙げた被験者が100%(8名中8名)であったのに対して、統制群の文章について衛生を変更の理由としたものはいなかった(7名中0名)。

Aartsらに従えば、実験群の被験者は衛生に関する目標が無意識のうちに設定され、それに関連する行動が促進されることになる。これを検討するために、被験者に菓子とスプレー式手指消毒用アルコール液を与え、これをどの程度使用するかを計量した。目標伝染が起こるとすれば、実験群の被験者は消毒液使用量が増加することになるだろう。また使用の理由について、事前に読んだ文章を挙げる割合は低いと予測できる。

方法

実験参加者 大学生76名が参加した。参加者は実験群と統制群にランダムに割り当てられた。

手続き 両群の被験者とも、前述した衛生に対して敏感である女性を記述した6文からなる文章をまず読むことが求められた。この文章を読んだ後に、被験者はこの文章が子ども(小

1, 小6, 中3)にどの程度理解できるかを評定するよう求められた。その後、多種のクッキーと押下式のスプレー式の消毒液が載ったトレーが被験者の前に差し出され、実験のお礼としてクッキーを食べてよいこと、また消毒液を利用できることが告げられた。その後、消毒液を利用した場合にはなぜ消毒液を利用したか、また普段の手洗いの習慣についての質問を受けた。

結果と考察

消毒液の使用前後の重量を計測し、消毒液の使用量(g)を従属変数とした。使用理由に関する質問において、文章を読んだから」というように、文章の存在に言及した被験者5名(実験群3名、統制群2名)を除いた。なおあまりに微量で前後の計測値の差が0のものは0とし、 $\pm 2SD$ を超えたデータを除いた。

このデータについて集計を行うと、実験群は0.22(SD=0.19)、統制群は0.13(SD=0.12)となった。検定の結果、両群の差は有意傾向であることが示された($t(50)=1.94, p=0.058$)。

以上の結果は目標伝染が起きた可能性を示唆するが、十分な形で示されたとは言えない。この理由として、被験者の性別が考えられる。というのも、今回使った押下型の消毒液は使用に際して程々の力が必要となる。よって男性と女性の被験者では使用量が異なる可能性がある。また男女では衛生に関する意識も異なる可能性もある。よってこうした性別に関する要因を分離して検討することが望ましい。

そこで性別要因を加えた分析を行った。なお対象とした被験者は消毒液を使い($\pm 2SD$ のものを除く)、かつ手洗いの理由について提示文章への言及がなかった41名(実験群男性:7名、実験群女性:14名、統制群男性6名、統制群女性:14名)であった。分散分析の結果、実験条件の主効果が有意であった($F(1, 37)=4.13, p<.05$)。前述したように、実験群が統制群よりも、多量の消毒液を用いている。また性別の主効果が有意傾向となり($F(1, 37)=3.71, p<.10$)、男性の方が女性よりも多く使う傾向が見られた。交互作用は有意ではないが、実験群と統制群の使用量の差は男性が0.03gであったのに対して、女性は0.08gとなった。

本研究では、Aartsら(2004)の目標伝染についての知見を衛生文脈において再検討した。その結果、衛生についての目標は実際に伝染すること、またその効果は性別により異なる可能性が示唆された。ただし、この研究では目標レベルの効果と、特性レベルの効果が混在している可能性があり、これを分離した実験を行うことが必要となる。

参考文献

Aarts, H., Gollwitzer, P. M., & Hassin, R. R. (2004). Goal contagion: Perceiving is for pursuing. *Journal of Personality and Social Psychology*, *87*, 23–37.